

讃岐香川の様々な文化発展を応援します。

文化通心

B U N K A T S U S H I N

2020冬 No.108



新しいって、なに？

銀杏の葉が黄色に輝くなか、Eclogion（代表：三木優希）のコンテンポラリーダンス公演が塩江美術館で開催された。ひとつの作品として完成されたダンスと音楽と美術がコラボした実験的なステージが新鮮だった。コロナ禍も悪い事ばかりじゃないのかも。（中條文化振興財団助成事業）

写真：Miyawaki Shintaro

- 第6回 あ・うんの数寄講座 茶の湯をさらに楽しむ夏期講習
- 五人様茶会 南岳没後百年記念茶会
- 12月から2月までの茶華道情報
財団からのお知らせ

発行：公益財団法人 中條文化振興財団
〒760-0017 高松市番町2丁目1番12号
TEL (087) 826-3355 FAX (087) 826-2212
2020年冬号 No.108 12月1日発行（季刊）

第2回
8月22日(土)

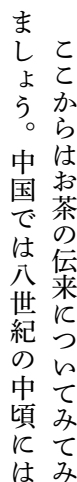
「鑑真・空海・白樂天」

講師 諸田 龍美 (愛媛大学教授)

持ちになりご挨拶され、「これが遠州流の挨拶です」と教えてくださり、ご自分の中国古典文学の研究と茶の湯との関係からお話を始められました。茶席に掛ける漢詩の意味をどうとらえるのか、それは、自分の研究を実践すること＝茶の湯であると気付かれたそうです。茶の湯との出会いはご自宅のリフォームをしていたのだいた設計士の方が茶室を作ってくださいったことと、その方が遠州流をされていたことによると紹介してくださいました。

まず漢文について、当時のヨーロッパの公用語がラテン語であったように東洋

鑑真和尚の来日や、遣唐使の交流などで様々な唐文化がもたらされました。この遣唐使の中には空海や最澄がおり、そして最後の遣唐使により白居易の詩文が持ち帰られました。「年代から見て、白楽天と空海が同じ時代に生きていたことになるので、もしかすると唐でお二人が会っていた可能性がありますね」と話され、私たちの創造も豊かにしてくださいました。こうしてもたらされた白楽天の詩は日本人の美意識に大きな影響を及ぼしています。例えば「雪月花」日本人の四季の自然美を表していますが、これも白楽天の詩が出典です。



当時のお茶は現在のような抹茶や煎茶ではなく、茶葉を蒸して突き固めた団茶と言われるものでした。茶礪（茶碾）のようない道具で粉にし、私末（羽箒）で集め、羅合（篩と蓋物の茶入れのセット）に貯えます。牡蠣や蛤あるいは銅や鉄や竹製の則（茶杓）ですくい、瓢箪を割いたり木を削って作った瓢（ひしゃく）で湯を

（千葉規美子）

第3回
8月23日（日）

「綺麗さびの心と美の出会い」

講師 浅井 宗兆
(遠州流茶道家元主鑑)

浅井宗兆宗匠は十二世、紅心小堀宗慶宗匠の次男で、実兄の十三世宗実宗匠が家元を引き継ぐのを機に、小堀家と深いご縁のあった近江の戦国武將、浅井長政で知られる浅井家を再興すべく、紅心宗慶宗匠より逢心庵 浅井宗兆の号を授けられました。

宗兆宗匠は、毎月松山で遠州流の稽古をされており、この度夏期講座でもお話をさせていただきました。

遠州流は、茶祖・村田珠光、武野紹鷗、千利休、古田織部に継ぐ五大宗匠の一人として、独自の美を創造し「綺麗さび」の茶を確立しました。

最初にお話されたのは、遠州公は徳川幕府で伏見奉行を務めた武家であったこと。美しい甲冑は、細部に渡って色やデザインについて細かく指示した注文書が残っているそうです。家紋は、七宝紋と丸に卍。三代將軍家光の茶道指南役も務めました。

床には権十郎法楽が定家様の文字で書かれた「書捨文」が掛けられ、皆で唱和しました。書捨ての文は遠州公のお茶に対する考え方を代々伝える文です。

「それ茶の湯のみちとても他にはなく君父に忠孝を尽くし家々の業を懈怠せず、殊には朋友の交わりを失うことなかれ。春は霞、夏は青葉がくれのほととぎす、冬はいとど寂しさ勝るゆうべの空、冬は雪の暁、いずれも茶の湯の風情ぞかし」と始まります。

茶の湯は、非日常でありながら日常茶飯の中にあつて難しい特別なものではなく、多くの人の力を借りて成り立つものである。さらに、一つの道具でも取り合わせの工夫で新しい発見をすることが大事ともありました。

また、季節感を積極的に取り入れた感性は、宗旦の侘び茶に対する綺麗さびの追及に繋がりました。新たな時代に則して、洗練され垢抜けた茶の湯。明るく開放的な茶の湯を目指したとされました。

江戸時代に入ると平和で豊かな時代になり、求められるままに大名への茶道指南や道具の目利き、新たに道具を作る機会も多くなり、後に松平不昧公によって



中興名物とされる遠州の美意識の創成に取り組みました。

中国や朝鮮、遠くはオランダのデルフトにまで道具の発注をしたほか、国内の国焼きの陶工への指導もして、数多くの名物を排出しました。

その特徴と考え方をご紹介していただきました。先ずは中興名物の瀬戸春慶の瓢箪茶入と高取の円座瓢箪茶入。それぞれ象牙の蓋に一本のすが入っています。これは象牙の中に一本だけ通っている神経の部分が茶色の線になるように作られていて、遠州流ではこのすを右側に置いて、景色としました。この時、茶杓は蓋の左側に置くのが正式だそうです。

また、瓢箪は「ふくべの教え」として、逆らわない、押し付けない、自由なままにする。という意味もあつて遠州公の好みのモチーフで、瓢箪型の茶入は、形もいろいろで沢山作られたようです。茶入は瀬戸の他、高取や丹波焼、膳所焼、志都呂焼などもあります。上の方にちよつと小さな耳を付けた瀟洒な形も好みました。

次に、織部から贈られた古芦屋の大黒釜と、それによく似た京都三条釜座の飯田助左衛門作の面取釜が紹介されました。遠州のデザインの特徴となる「面取り」については、釜だけでなく茶入、茶碗、水指にも好んで面を取られたそうです。柔らかい曲線の中に面を取ることでキツパリとした直線を入れるのは、それぞれの職人にとっても難しい作業で、高い技術を取得する機会となりました。

さらに好みの文様として「七宝紋」があります。二代大西浄清の伽藍釜は七宝地紋が釜の胴一面に広がっています。七宝は自在に広がって行くことができる文様として好まれ、七宝紋透の砂張の蓋置は小堀家の家紋で、正式の濃茶をするときに使われるそうです。

お茶碗については遠州高取の切形重ね茶碗。丸いお茶碗の一箇所を少し「前押せ」をして凹みをつくりました。重ね茶碗を取りやすくするという配慮もありましたが、ひとつの景色として、よく使われました。また、「切形」は、陶工に形の指導をするために紙をその形に切つて送つていたと言われています。

特に宇治の朝日焼の場合は、お茶の上林から、將軍家にお茶の献上をする際に新しく献上する茶碗を焼くために相談され、切形に加えて、「篋取」や「轆轤目」を残すとか「刷毛目」を施すとか、変化させ方も指導されたそうです。

利休は黒、織部は緑、遠州は白を好みました。白は自由で無限。いろいろに染

まることができる。というのも遠州公のお茶に対するスタンスが垣間見えます。

中国に発注した染付は滲みのない祥瑞の茶碗や水指。伊羅保や熊川といった高麗茶碗などは唐物と区別して、新高麗と箱書しました。こうした新しい道具の箱書きについては、価値を高めるために松花堂昭乗や、江月和尚に、画賛や銘を付けてもらうなど、寛永の文化サロンとも言える後水尾天皇を中心とした当時の文人達も後押ししました。

特に茶入れなどは、金欄や、緞子、更紗、間道などの名物裂地集めて、茶入に映りの良い仕覆を添えて、遠州好みとして伝えられました。

また、瀬戸破風窯・音羽手茶入 銘・児手柏こてがしわにも見られる様に茶入には歌銘が添えられました。「奈良山の児手柏のふた面」とにかくにもねじけひとかな。この茶入には表と裏に景色があつて、仕覆も四種類ついています。

幼少の頃から和歌に親しんだ遠州公は定家様書風で、茶入のほか茶杓など、道具それぞれにふさわしい和歌を選んで歌銘を付けました。和歌を取り入れることによって王朝文化の復権と茶の湯にそれまであまりなかった季節感を取り込むことが果たされました。

辞世の句は、「昨日といひ 今日とくらして なすことも なき身の夢を さむるあけぼの」。歌が記された料紙には余白がたつぷり残されていたそうです。

(中條晴之)

第4回 8月29日(土)

「初期京焼の展開

『隔窠記』をめぐる』

講師 安田 浩人(粟田焼)

金閣寺の住職、鳳林承章が綴った日記、隔窠記。鳳林承章は宗派や茶の湯等を通して公家から武家・町衆など幅広い人たちとの交流があったので、隔窠記は江戸初期の人々の趣味や暮らしを垣間見ることが出来る貴重な資料として知られています。鳳林承章43歳の1635年から1668年、実に34年間にわたるの日記で、広辞苑くらいの厚みの本が6冊分くらいあります。この隔窠記を読むのが、野村美術館の谷館長の呼びかけで定期的に開かれているそうで、今回の講師である安田浩人さんもその会のメンバーです。

この隔窠記には、後水尾天皇、千宗旦、小堀遠州、金森宗和、片桐石州、野々村仁清、池坊専好、狩野守信、本阿弥光甫など、華やかな寛永文化を彩る名だたる文化人達が登場します。中でも千宗旦は67回登場しています。

▼1640(寛永17)年4月2日

ふと、宗旦の宅に行ったら留守だったの、武田茂淵の所に寄ったら、宗旦が居た。座敷に上がりお茶を飲み、宗旦は先に帰る。後で寄ったと言ったので、宗旦宅へ。晩ご飯に汁かけ飯を食す。今日は宗旦が先年借りたお金

の借入書を返してあげたら、宗旦は喜び、お茶を一包くれた。黄昏時に帰山。

▼1642(寛永19)年7月28日

今日昼過ぎに宗旦にお茶に呼んでもらった。昨日の約束で、相伴は…、お菓子のお茶会であった。お茶の後は書院にて談話、宗旦は平家の歌を詠んだ。

▼1643(寛永20)年6月5日

朝から大雨。宗旦のところで菓子のお茶会。客は私1人。その後本法寺の知り合いが来て書院にて冷麺を食べた。宗旦から自作の茶杓をもらう。

▼1643(寛永20)年7月4日

帰山の刻に宗旦が来た。厚公が持っていた利休居士筆の書状の掛け物の鑑定を依頼し、宗旦に見てもらった。正筆であるとのこと。

▼1650(慶安3)年5月20日

不審庵へ宗旦を尋ねる。入ってと言われたのでお茶を喫す。私が所持していた茶杓を見てもらうと、利休宗易の作であり、疑う余地無し！筒をそろえて書き付けをするように、とのこと。…

この様な感じで、お茶をしたり道具を見てもらったり、宗旦と鳳林の日常的なお付き合いと仲の良さがうかがえます。

宗旦の子供3人が三千家の始祖になったことや、片桐石州や小堀遠州が名を連ねていたこの京焼の初期の頃は、茶の湯の隆盛真っ盛りであったのでしょね。そして金森宗和は69回登場しているそうです。

▼1645(正保2)年2月2日

金閣寺に帰る途中、田中宗因の所に寄る。金森宗和に、久留嶋丹州からもらった豊後竹で花入を作ってもらえるよう頼んだら、すぐに作ってくれたので、「電光」と銘をつけた。

鳳林は、宗旦同様に、金森宗和とも仲良くお付き合い出来ていたようです。また、野々村仁清は金森宗和との出会いで開花したと言われています。優れた才能とそれを活かせる人達、そんなネットワークの真ん中に鳳林は居たのだと感じます。

さて、この隔窠記にはなんと、理平焼の初代、森島作兵衛が登場します。

▼1640(寛永17)年3月13日

午の刻、大平五兵衛と作兵衛が来た。作兵衛は粟田口で茶入を焼く者で、内海の茶入を1壺もらった。作兵衛は、裏山に登って焼き物の土を探した。2色の土があった。

▼1640(寛永17)年11月8日

私が持っている粟田焼の肩付茶入を大平五兵衛に見せたくて、持って行った。…金森宗和が切型を作り、粟田口作兵衛が作った物である。

▼1641(寛永18)年5月20日

大平五兵衛が粟田口作兵衛の茶入を5個持ってきた。切型を渡してあった物である。3個頼んでいたので、2個は返し、3個もらった。

▼1643(寛永20)年3月27日

昨日、後水尾上皇さまに頼まれ催した茶会が、成功した。芝山大膳(甥・公家)に託し、工夫して作った御前の御茶道具を、上皇にさし上げる事にした。

…茶入は2つあったので、袋に入った方にした。粟田口作兵衛が作ったあめ釉の丸壺である。

作兵衛は京で活躍したのち、初代高松藩主松平頼重公に召し抱えられ1649年に理平焼を開窯します。しかしこれらの茶入は今どこに…？鳳林ってなんてう

らやましい人なんでしょう。さておき、このように作兵衛が茶入を作っていたという史実。

江戸時代に入り政治の中心は江戸に移ったけれど、文化の中心は依然京であり、茶の湯が盛んに行われ、数寄者たちから茶器のオーダーを受けていたのが粟田口焼。それが京焼のルーツだそうです。皆さんも思い当たる事があると思いますが、お茶会の道具組を考えると、欲しいなと思う道具が有りますよね。無かったら〇〇に作ってもらおう！みたいな。当時の茶人たちのそんな気持ちが京焼を作り上げてきたのだと思います。茶道具の作家を育てるには、作家自身の努力や才能に加えて、プロデューサーやディレクションが出来る茶人の力も大きいのだと思います。

理平焼のご当地高松にとってもご縁のある内容の講演でしたが、講師の安田浩人さんは、茶道を愛するがゆえに粟田焼を再興した陶芸作家です。安田さんは今回自身のPRをほとんどなさりませんで



したが、彼の作品は、平成30年正月号の淡交や、NHK大河ドラマ「八重の桜」の最終回で、綾瀬はるかがお茶の稽古をするシーンや、連続ドラマ小説「半分青い」にも登場しています。また、理平焼15代目が京都で修行時の下宿先の大家さんでもあり、ますます身近に感じます。私達はまずはしっかり茶の湯に励むこと、それがひいては安田さんの栗田焼やご当地の理平焼を盛り立てていく事につながる、と考える次第です。(原 大策)

第5回 8月30日(日)

「奥村家の仕事を継いで」

講師 奥村 吉兵衛(千家十職 表具師)

掉尾を飾る第五回目は、千家十職、表具師の奥村吉兵衛先生の「奥村家の仕事を継いで」と題した話を聴講しました。南方録に「掛物ほど第一の道具はなし」とあります。その掛軸などの表装を司る表具師の話はとても興味津々ながら、難しい専門用語の職人仕事の話についていけるかと、少し構えた思いがありましたが、登場のご挨拶の後、「どうぞお気楽に」と、京なまりのやさしい言葉があり、何となく緊張が溶けました。

話は奥村家の歴史話から始まり、遠祖は江州佐々木家の流れをくむ武士・奥村三郎定道で、小谷城の浅井家に仕えてい

たこと、前田家に仕えた二郎定光の次男にあたる吉右衛門清定が母方の家業・表具職を継いで奥村家元祖になった経緯や、その後、武士を捨てて京に上り、京都小川通上立売上ルに近江屋の屋号で「表具師」の暖簾を掲げたのを初代とし、現在(京都釜座)の十三代までの歴史が語られました。

世襲名の吉兵衛を名乗り始めた二代目が、表千家六代覚々斎家元の職家として出入りするようになり今日に至るも、その間には、表千家が茶頭として仕えた紀州徳川家の御用達にもなったこと、跡継ぎの男子がいなくて婿養子を迎えて家業を続け、なかには、せっかくの女婿が若死にし、改めて娘を再婚させて家を守ったことなど、女系家族のドラマもあったようでした。

表具の軸裏や屏風・風炉先・包紙・表具箱裏に印判を使い始めた七代目・吉次郎、明治維新後の茶道衰退期を乗り切る九代目の苦勞、十一代に至っては戦後の耐乏生活を勤め人になって凌いだこと、現在の自分は隠居した父や叔父たちと仕事をしていることなどを話されて、代々の家業を全うしていく大変さが累々語られました。

歴代の作品群をスライドにして表具師の仕事が披露しながら、紙と布(裂)で構成された軸、屏風、襖などが宗教に関連して渡来、それが高い技術や洗練されたセンスに磨かれ、さらに、拝む対象として神社仏閣を荘厳してきたものが茶の



湯の世界に用いられるようになり、それがたくさんのお家元をはじめとする宗匠方や数寄人たちとの仕事上の付き合いに恵まれ、奥村家が存続してきた由縁を謙虚な語り口にして結ばれました。仕事柄、たくさん道具を拝見する機会にも恵まれ、京都ならではの歴史の重みを感じることなども、しみじみとした口調で付け加えられました。

作業風景動画もあり、お父さんが出演するシーンでは「職人は口動かさんと手動かせ」とよく父に言われたと、この世界の技術の踏襲の厳しさを日常の中でいろいろ経験されたようでした。求められる技術の高さに応えていく職人の誇りは理屈ではなく、腕の実績勝負ということでしょう。

掛軸の本紙は仮張りして一年ほど乾かすのだが、乾き具合が春夏秋冬で微妙に違うことも覚え、これらが狂いのない仕上げて影響するだけでなく、後年になって遣り替えの効く仕事につながると強調されましたが、こは、ひよっとしたら後世の人に「いい仕事してますねえ」と

唸らせてもやろうという職人の腕さすりかと、思わず笑みがこぼれました。但し、修復物を預かるのには出所のはっきりしない難問題があって、例えば、真贋責任とか、先の仕事ぶりに左右される仕上げの難しさなど、思わぬ苦労話もちろほらしました。飾って使う時に冷暖房の風に留意するとか、巻いたり畳んでしまうのに雨の日を避けるとか、大事な掛物や屏風に気遣うようにと扱いの大切さを説かれ、でも、お軸などが危うくなりましたら、私共の仕事以外のものでもご相談に応じますと、ユーモアを交えた親切な添え言葉もありました。

プリントの説明では、いわゆる茶掛表具(装)は格式でいうと輪補表具(輪補表具)といって草の行にあたり、一般に、宗匠・茶人の書や絵、または絵賛物、禅僧の墨蹟などに用いると、話が専門的になりました。もちろん、仏画や宸翰はまた違いますが、今日の待合の床には画賛物なので付け風帯、立札には塗りの軸端、座敷の軸端には華やかに永楽の焼き物を使いましたと、本紙に合わせた表装ぶりの実例紹介の後、最後に、湿らせた和紙を分厚く重ねて四つ折りにする紙釜敷の作り方実演がありました。何度にも分けて体重をかけ乍らの力仕事でしたが、紙包丁で整えた断面が鋭く光って見事な仕上がりを見せた時、そこには、今までのやさしい表情を一変させた表具師・奥村家十三代奥村吉兵衛の真剣な仕事顔がありました。(妹尾共子)

五人様茶会

南岳没後百年記念茶会

十一月の財団法人釜は「藤澤南岳」没後百年を記念して、濃茶席・表千家流美澤宗包先生、薄茶席・武者小路千家岡田和恵さんご担当の五人様茶会。前日の雨もあがった小春日和の一日、郷土の偉人を偲びながらのひとときをお楽しみいただきました。



茶会の主題は美澤先生が敬愛してやまない藤澤南岳賛歌とも言えます。か。お茶本来の、季節を気遣った道具の取り合わせや作法通りの扱い、また時節柄、コロナ感染に配慮した茶室に客を招き、南岳父子や孫が揮毫した掛物をご披露しながら、主客ともどもお茶を楽しむという趣向にしてみました。

南岳（藤澤恒）は、幕末の高松藩を戊辰戦争の危機から、また、高松城下を戦火の危うさから救ってくれた恩人として語り継がれています。慶応四年、鳥羽伏見の戦いでの発砲事件で朝敵騒動に巻き込まれた高松藩は、家老二人の切腹と十二万両の献上金という多大の犠牲を払いながらも安堵を極めました。その裏には、自らが主宰する泊園塾の門下生であつた薩摩藩士を伝手にして、官軍に嘆願書を提出して交渉を成功させた若き儒学者の働きがありました。

日本の夜明けを夢見た勤皇の若者たちが命をかけて論じ戦った時代です。そんな時に、我が讃岐・高松藩危急存亡の折

に登場した熱血のエネルギーに共感されたのでしょうか、はたまた、明治期に入って学問本道（父の東咳が大坂で開いた泊園塾を長男の南岳が後を継ぎ、後年になって泊園書院と改名。関西大学の源流）での成功ぶりに尊敬の念を深くされたのでしょうか、席主の美澤先生の傾倒ぶりはただ事ではありません。

「いえね、昔にね、たまたま塩江町の山あいに茶室花待草舎を建てたのがご縁で、塩江出身の藤澤南岳さんを知ったんです」が出発点らしいのですが、南岳の書の蒐集はつとに有名で、今までも個人的に南岳啓蒙の茶会をもったり、平成二十五年には高松市歴史資料館で「知の巨人 藤澤東咳展」没後百五十年記念「開催の折にも添釜で来館者をもてなしたり、軸や屏風にした秘蔵の書のご披露が度々ありました。さらに近年、街道から少し入った塩江温泉団地の一角に茶室東南荘（父・東咳、子・南岳）を設けられるなど、先生の南岳熱は弥増すばかりです。

さて今回の茶会、寄付の床の額は、昭和の大阪文壇の大御所であり、南岳の孫にあたる作家・藤澤恒夫（西華山人）の筆・白楽天の五言絶句の色紙。酒を愛でる詩にウイスキー壺の自作絵も添えて、洒落た文士のお出迎えがありました。

さらに、広間には南岳の軸をはじめ、友人たちと江南の春を楽しむ様子の画賛絵巻物、塾生だった高松市初代市長の赤松渡や華道嵯峨御流総裁の軸装などの展示があり、しばし鑑賞の後、案内があつて露地から美藻庵に進みました。

躍り口から身をかがめて入ると、床壁に自邸の庭の様子を五言絶句に詠んだ東咳（藤澤甫）の書、床畳に南岳の額写真が飾ってあり、父子の長幼の礼儀正しさに感じ入りました。柱に掛かった躑躅の花入れに白椿初嵐、菓子には光琳菊という晩秋の風情の中、静かに湯気をたてる釜の湯で四滴点前の各服（一人点て）の濃茶をいただきました。旧知の主客が和やかな会話で次々と茶道具にスポットライトを当てていきます。やがて、茶杓の材は

黒文字ですとの後で、主のつれづれ話で、塩江町の山深い所に松平家の黒文字の木畑があつたと聞き、美澤先生の塩江ツウの一面が伺えました。

薄茶席は晴松亭座敷。床には南岳の一行物「百里行者半九十里」、後世、事を成すにあたって最後まで慎重にすべしとの格言にもなった中国古典「戦国策」の一節です。亭主の岡田さんは天遊卓で薄茶を点てながら、脇床の花入れの前にバラバラ置いた黒い小石は：と、東咳の子供時代の逸話、習った字を河原の小石に書いておさらいしていたら、河原が真っ黒になったという勉強の跡を再現したものですと話されました。漢学の泰斗も幼少期からの努力あつてこそ、地元では子供たちへの「勉学のすすめ」とした有名な話が茶席で披露されると、先ほど来偉人に身近さを感じたり、両方の席主たちの連携した一体感が伝わってほのぼのとなりました。

続いて、立礼席で点心のお料理をいただくことになりました。床に松平頼該（左近さん）筆・鯛釣図。瀬戸内の穏やかな海に漕ぎ出した小舟に御船印「高」を染め抜いた旗、釣りを楽しむお武家様はご自身とお見受け。絵筆も達者だった頼該が、藩の方針を評定する城中書院会議の折に、若い南岳を強く後押しした勤皇の殿さまだったことを思うと、見事な布石にいざなわれた美澤先生の南岳賛歌を痛感するとともに、郷土、地域を大切に

手土産に食パン？

最近県内にもたくさんの食パン専門店が出店してきました。そのまま食べても耳まで柔らかいものや、ほんのり甘い食パンなどそれぞれのお店に特徴があって面白いですよ。数量限定でいつ行っても買えるものとは違う希少感が手土産にもぴったりです。

ではなぜ四角いパンを食パンと呼ぶようになったのでしょうか？美術デッサンで線を消すために使っていたパンを消しパンと呼んでいたのに対して食パンと呼びだしたとか、明治時代に外国人が主食として食べていたパンだから主食パン、食パンと呼ぶようになったとか諸説あるようです。イメージとしては菓子パンはおやつ、食パンは主食って感じから主食パンの説が面白そうです。

専門店食パンは一本売りがほとんどです。一本で800円前後が相場みたいです。この一本は約2斤、スーパーなどで売っている袋入りのパンは半斤です。価格的には2倍程度でしょうか？この800円前後の価格設定が手軽な手土産に最適な価格設定ではないでしょうか？

自分のためのちょっとしたご褒美にもいいんじゃないでしょうか。ぜひ並んでいろんなお店の食パンを楽しんでみてください。



お茶の風景(10)

聖夜

昭和の半ば過ぎ、歳末の商店街にジングルベルが流れ、イブには俄クリスチャンの酔っぱらいが夜の街を横行する光景がよく見られました。翌朝、洋菓子店では売れ残ったケーキを山と積んで安売りし、この現象を女性の結婚適齢期になぞらえて、女は二十四、二十五で一転…などと、今では考えられない笑止な俗説が囁かれたりもしました。

近年はお茶の世界でも聖夜をしつらった演出で、ツリーやサンタ、トナカイなどを形どった和菓子を一碗の茶に添えて、異国の風習を祝う茶席も珍しくありません。

写真のサンタさん、赤い三角帽子に白い髭はともかく、半袖に海パン、ビーチサンダルといういで立ち。南国のハワイでは良い子にプレゼントを配る時のコスチュームもかくやあらんというわけでしょうか。

古今東西、救世主誕生の宗教行事はスタイル様々に季節の風物詩になりました。



新型コロナウイルス感染拡大防止のため、
急遽中止になる事もあります。お出かけの前にご確認ください

財団行事予定(12月~2月)

12月

- ◆ 懐石講座 三友居 山本勝先生
12月1日(火) 午前11時・午後3時
- ◆ 書道教室 毎月第1・第3金曜日
森本義人先生
12月4日・18日(金) 午前10時~12時
- ◆ 和菓子講座 毎月第2金曜日
高橋初乃先生
12月11日(金) 午前10時~12時
- ◆ ヤングヤング(子供茶の湯教室)
毎月第2・第4土曜日 山下純子先生
12月12日・26日(土) 午後1時~
- ◆ 月に一度の喫茶室 毎月第3火曜日
12月15日(火) 午前10時~午後2時(受付)
自由なお時間にお出掛け下さい。
ランチは要予約です。

1月

- ◆ 初釜
武者小路千家の高昌先生が點初のお席を設けてくださることになりました。
「令和三年。新型コロナウイルス禍での新年を寿ぎ、また邪悪な疫病を祓う御茶を差し上げたく存じます。」と席主からの

- メッセージと合せてご案内いたします。
好例の福引もありますのでお楽しみに。
日時 1月5日(火)
処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)
席主 武者小路千家 高昌守徹
茶席 濃茶・薄茶・点心席
会費 8,000円
入席時間ご案内
第1席 A席・B席 9時
第2席 A席・B席 10時30分
第3席 A席・B席 11時15分
第4席 A席・B席 12時45分
第5席 A席・B席 14時15分
各席6名様 2時間15分を予定
◆ 和菓子講座 高橋初乃先生
1月8日(金) 午前10時~12時
◆ ヤングヤング 山下純子先生
1月9日・23日(土) 午後1時~
◆ 書道教室 森本義人先生
1月15日・29日(金) 午前10時~12時
◆ 月に一度の喫茶室
1月19日(火) 午前10時~午後2時(受付)
自由なお時間にお出掛け下さい。
ランチは要予約です。

2月

- ◆ 書道教室 森本義人先生
2月5日・19日(金) 午前10時~12時
- ◆ 和菓子講座 高橋初乃先生
2月12日(金) 午前10時~12時
- ◆ ヤングヤング 山下純子先生
2月13日・27日(土) 午後1時~
- ◆ 2月月釜 五人様茶会
「皆様いかがお過ごしですか。人恋しいこの頃です。来年こそはお会いしたいですね。」と氏家先生からの一言を添えてご案内いたします。
日時 2月14日(日)
処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)
席主 裏千家 氏家宗鶴
茶席 濃茶・薄茶・点心席
会費 5,000円
入席時間 1月「初釜」と同様
- ◆ 月に一度の喫茶室
2月16日(火) 午前10時~午後2時(受付)
自由なお時間にお出掛け下さい。
ランチは要予約です。

茶華道ガイド

茶道裏千家淡交会香川支部

TEL 090-4337-1280

3/7 多度津分会 月釜 席主：阿部宗美
総合福祉センター 500円 10:00～15:00
3/7 善琴分会 月釜 席主：香舛会
樟蔭軒 500円 10:00～15:00

武者小路千家香川官休会

TEL (087) 862-8574

中 止 1/24 香川官休会 月釜 席主：小池妙公
無量寿院 700円 9:00～15:00

おいでまい香川

香川県内の様々な

イベント情報を

随時更新中!

<https://oidemai.kagawa.jp/>



● 財団からのお知らせ

中條文化振興財団

中條文化振興財団・文化活動奨励事業

10月1日(木)、財団の設立記念日を
迎え、令和2年度財団賞授賞式及び助
成金交付団体認定書授与式を開催い
たしました。

財団賞の庵治踊り保存会と吉田る
いま氏には、藤川代表理事より賞状
及び奨励金を贈呈致しました。

続いて、助成金交付認定を受けて

いるEclogion、高原水車友の会、高松
東部商店振興会に認定書が授与され
ました。

受賞後のご挨拶では、活動の概要
やコロナ禍での新しい取り組みなど
お話いただき、どの団体も、大変厳し
い状況の中、前向きに活動をされてお
られました。



式典終了後の懇親会は、新型コロナ
ウィルス感染防止の為、中止としま
した。

令和3年度 助成金応募受付中

● 対象事業

令和3年4月1日から令和4年3月31日
までに実施予定の文化事業。
詳しくは助成基準をご覧ください。

● 応募の方法

財団所定の助成金交付申請書を提出
してください。(HP参照)

応募締切は、令和3年1月末日。

審議委員会による書類審査を行い、
必要があればプレゼンテーションを
開催。令和3年3月末までに結果をご
連絡致します。

● 助成金

30万円を限度とし、活動に応じた金
額を審議委員会が決定致します。

助成基準、所定の申請書等は、当財団
ホームページよりご確認くださいか、
事務局までお問合せ下さい。

<https://chujo-zaidan.or.jp>

編集後記

マスク着用も日々の生活に溶け
込んできた一年でしたが、最後の
月となりました。

春先から計画していた催事も感
染症の流行のためやむなく中止に
なったことは本当に残念でした
が、この災いの中でも夏期講習は
開催され講師の方々のお話を聞
き、たくさんさんの学びができて幸い
でした。

また、取材のなかで活躍されて
いる方たちとの出会いや、財団賞・
助成金制度を通じて地元の人たち
の活動を知ることができました。
地道に一つのことに取り組んでい
る人たちがまだまだいらつしやる
でしょう。自薦他薦は問いません
ので財団にご連絡ください。

新しい年は例年のように催事が
できるようにと願っています。

【声・情報お寄せください】

〒760-0017
高松市番町二丁目一十二
公益財団法人 中條文化振興財団編集部
TEL (087) 826-1335
FAX (087) 826-2212
info@chujo-zaidan.or.jp